

# イノセンス・ワールド

神原 拓人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

西暦20XX年2月14日、白夜戦役を終結に導いた当時14歳の少年だった龍風俊幸は現在高等学校生になり、能力者（イノセンス）という立場を隠しながら退屈ながらも平和な日常を過ごしていた。

しかし、2年生に進級した年の春：戦いの歯車はまた回り出してしまったのだ：

# 目次

STAGE 1 序章

1



## STAGE 1 序章

物語の舞台は田舎町因幡の国の東部、鳥国（ちようこく）のさらに東に位置する岩井群にあり、物語はここから始まる。

『すつかり遅くなっちゃった。』

急ぎ足で帰路についている少年の名は龍風俊幸（たつなぎとしゆき）この物語の主人公である。彼は現在高等学校2年生で能力者（イノセンス）でもあった。それもただのイノセンスではなく、暗き者（クロノイド）と人間との間で起きた戦争・白夜戦役を終結に導くほどの実力者であった。

そんな彼が暗くなり始めた道は走っているとどこからか誰かが泣いている声が聞こえてきた。

「えっ、誰か泣いてる…のか？」

俊幸はあたりを見回してみると一人の少女がうずくまって泣いているではないか。

「おい、どうしたんだよ！こんなところで、大丈夫か？」

声に反応した少女が顔を上げると俊幸のよく見知った顔が見えてきた。

「あかり!？」

「としゆきくん…」

彼女の名前は天宮あかり（あまみや）、俊幸とはクラスが同じで普段は明るく誰にでも優しい女の子だ。

「どうしてこんなところで泣いてるんだよ？」

「グスツ、うんうん何でもないの…大丈夫、大丈夫だから」

彼女は涙を拭って大丈夫というが時刻は夜の8時を回ったところ田舎で街灯やひと気も少なく、女の子一人が出歩くような場所ではないことから心配しないほうが無理がある。しかも泣いているのだからなにかあったには違いないのだが…

『おいおい、大丈夫って大丈夫じゃないからこんなとこで泣いてたんじゃないのかよ。たくっ』

「わーた、俺は何も聞かない。でもそろそろ帰んねーと家族が心配すんぞ。送ってってやるから帰るぞー！」

彼はそう言っただけで彼女の手を取り引張った。すると彼女は

「だ、大丈夫だよ。送ってもらわなくても一人で帰れるから！」

「あのな、ただでさえ泣いてて心配してんのに一人で帰らせたら心配過ぎて夜も眠れなくなるわ！黙って送られてろ、たくっ」

「うっ、うううわかった。」

「分かったならよろしい、ほらさっさといくぞ電車乗り遅れちまう」

『送ってもらえるのは嬉しいけどせめて手は離してほしいよ〜はずかし〜』

そんなことを思っている少女を他所（よそ）に俊幸はあかりの手をグイグイ引つ張つて行く。

二人は無事に電車に間に合い、運良く座席に座ることが出来たので並んで座ることにした。

『ふうーなんとか乗れたな、運良く座れたし後は目的地に着くのを待つだけだ』

「ねえーとしゆきくん…」

「んっ、なんだ？」

「いつまで手握ってるの?」

「あつ、わりい」

少々困惑した様子で尋ねてくる少女に今頃気づいたかのように少年パツと手を離れた。た。

『ヤベエ、すっかり忘れてた。つーことは手繋いだまんまここまで来たってことだから

…今更になつてチョー恥ずかしいことしてたんだな俺…』

「ありがとう、としゆきくん」

「えっ、なんで?」

『俺なんかお礼言われるようなことしたかな?』

「としゆきくん、私をほつといて帰ることもできたのに私と一緒に居てくれてるでしょ、だからそのお礼」

そう言つて笑顔になる少女は不意にあくびをした。

「眠いのか? 眠かつたら寝ててもいいぞ? 着いたら起こしてやるから」

「ふえ、でも…としゆきくんもさつきあくびしてたよ。私は良いからとしゆきくんの方が寝て」

確かに俊幸はあかりの手を離す前大きなあくびをしていたが…

『いやいやいやいや、手を繋ぎっぱなしだったことに気づいて眠気なんかぶっ飛んじまったよ!』

「さつきはさつき、今は今ほんとに俺は大丈夫だからあかりは寝てな」

「うーんじゃあ、わかった。少しだけ肩借りるね」

「おう、つてえつ…」

『肩借りるね?…つてえええつ』

肩借りるねつといったあかりはなんのためらいもなく俊幸の肩に頭を落とし眠りについでいる。

『まつ、良いか別に減るもんじゃねえーし』



ちよつと驚きつつも俊幸は自分の肩で寝る少女を起こすのは忍びないのでそのまま寝かせてやることにした。

「おーい、あかり起きろーそろそろ駅に着くぞ」

俊幸はあかりにそう言つて優しく起こしてやると

「うつ、うーんつて、もう着いちゃったの?としゆきくんはちゃんと寝た?」

「いや、寝てないけど…つーか俺まで寝ちまつたら駅通り過ぎちまうかもしれないだろ?」

「そつ、それはそうだけど、もう少し早く起こしてくれば交代で眠れたじゃない?」

「別に気を使うことはないし、てか早く降りないと電車が出ちまうよ」

俊幸はそう言つて会話をきると立ち上がり電車の外へと出ていった。

「あつ、待つてよ。いたつ」

あかりも後をついて電車を出ると立ち止まっている俊幸の背中にぶつかつた。

「もくどうしたの?としゆきくん」

『なんだ!?!この禍々しい気配は…この気配はまるで3年前の…』

ードツカーン

ものすごい爆発音とともにあたりが土ほごりで視界が悪くなる。そして、駅構内に現れたのは俊幸にとって忘れることの出来ない存在…

「クロノイド!!」

「えっ、あれがクロノイドなの?」

俊幸の言葉にあかりは驚いたように大声を上げるとすぐ脇を瓦礫(がれき)が通り過ぎていく。クロノイド達に理性はなく、ところ構わず暴れまわっているようだ。

『くそっ、なんだってこんなド田舎にクロノイドが現れるんだよ!近くにあかりもいるし、力を使って戦うわけには…』

俊幸はイノセンスであることを学校関係者には隠していた。先の大戦である白夜戦役を終結させ、“白夜の英雄”という二つ名まであるほどの一種の有名人であった。当の本人はその名では呼んでほしくはないのだが…

「としゆきくん早く逃げなきゃ危ないよ!」

そのような思考をしていた俊幸の袖口を掴みながら小刻みに震え訴えかけるあかり、そんな彼らにもクロノイドの魔の手が…当たると思われたが…クロノイドの手は彼らに触れることなく、塵となって消えていったではないか!?

「えっ、どういうこと?」

あかりは訳が分からず間の抜けた声をあげる。そしてクロノイドが消え去った先には黒い大剣を持った長身の男性がこちらを向いて立っていた。すると俊幸は…

「た、橘さん!?!」

G  
O  
T  
O  
N  
E  
X  
T  
S  
T  
A  
G  
E  
} 崩壊  
}